

鶏舎の効果的なネズミ対策事例を発表

京都府畜産技術業績発表会が6月15日に開催され、京都府や近隣県の畜産関係者の参加がありました。当センターからは、鳥インフルエンザ対策として開放型低床式鶏舎におけるセンサーカメラを用いたネズミの行動特性調査に基づく防除方法について報告をしました。

カメラでネズミの出入りを確認した鶏舎の複雑な隙間を当センターが考案した資材等での封鎖や毒餌を効果的に設置することによりネズミが確認されなくなったことを報告しました。

参加者からは、研修会等による技術指導や、高床式鶏舎での応用を望む声もあり、高評価をいただきました。

今後は、畜産農家や関係機関を対象に「畜産セミナー」などでの周知を図り、鶏舎内へのネズミ侵入防止対策に役立ててもらおうこととしています。



当センター職員の発表

畜産センター

乳牛の飼料用トウモロコシの播種

トウモロコシは、夏期に栽培する牛用の粗飼料*であり、単位面積当たりの収穫量が多い上、栄養価も高く、牛が好んで食べる優れた飼料用作物です。

当センターでは、6か所のほ場で栽培しており、収穫量は約150トンを見込んでいます。良質なトウモロコシを多く収穫するために、予め当センターで生産した牛ふん堆肥をほ場に散布し、播種を行いました。

現在、生育状況は良好で、8月下旬から9月上旬にかけて収穫、ラップサイレージとして貯蔵し、10月頃から1年を通して50頭の乳牛に給与していきます。

良質な粗飼料を給与された乳牛は、高品質な生乳を生産するとともに、試験研究の被験牛としても活躍します。

※粗飼料：家畜に給与する飼料の中でサイレージ、乾草等を指し、乳牛などの反芻動物にとって粗飼料は胃の機能を維持し、エネルギー、栄養素を補うために不可欠である。



播種前の耕起、整地作業 (6月1日)



農業機械による播種作業 (6月8日)

良好な生育状況 (6月29日)

畜産センター

ユーザーの意見を生かした自動式車両消毒装置の設置

当センターが開発した低コストで導入できる自動式車両消毒装置を、南丹市の酪農家に設置しました。今回で3か所目の設置になりますが、装置の設計に当たっては、農家の要望や現地の状況を考慮して詳細仕様を決定したほか、既に導入した農家からの意見も参考に、ドライバーからの視認性向上のための警戒色塗装や、散水量調節バルブの取り付けなどの改良を行いました。

今後も、農家訪問時などに本装置の導入を提案するほか、各家畜保健衛生所と

連携し、PR用チラシを配布するなどして、農場の防疫対策の向上のため普及に努めていきます。



設置した消毒装置での試運転の様子

畜産センター

畜産環境保全推進会議を開催

当センターでは、畜産課、各広域振興局、各家畜保健衛生所及び各農業改良普及センターにより畜産環境プロジェクトチームを設置して連携した畜産環境問題の解決と発生防止を行っています。

6月28日、6月の環境月間に合わせてプロジェクトチーム活動の一環としてに畜産環境保全推進会議を開催しました。各地域で行っている畜産環境問題への指導状況について情報共有と意見交換を行い、今後も連携した環境指導と家畜堆肥の有効活用等により、問題発生防止を行っていくことにしました。

また、畜産の現場では、高濃度アンモニ

アガスの臭気対策が大きな課題となっていることから、臭気除去技術の確立に対する強い要望があり、今後当センターで検討を進めていきます。



関係機関と情報交換し、現地の課題解決につなげる

畜産センター

レンタヤギが大人気

当牧場では、毎年、春から秋にかけて畦草の除草や情操教育のため学校教育の一環として、希望する府民や学校等に山羊の貸出し（レンタヤギ）を行っています。

今年度は、山城から丹後まで府内全域で府民や関係機関等から問い合わせが多数寄せられ、昨年より2か所多い9か所

へ貸出す予定です。

現在、高校を含む府内6か所で10頭が除草などに活躍し、利用者から「休耕田の除草に大いに役立ったので労力削減につながったので来年も借り受けたい」などの声が寄せられ、レンタヤギの人气が更に高まっています。

畜産センター碓高原牧場

新型アブトラップ効果の報告

アブは7~9月に発生し、吸血により、牛のストレス要因になりうるほか、伝染病を媒介することもあり、牛飼養農家にとってやっかいな害虫です。

当场では昨年度から近畿農政局と協力し、農研機構^{※1}が開発した安価に自作可能な新型アブトラップ^{※2}を放牧場に設置して、有用性を実証する試験を行っています。

このたび近畿2府4県の畜産関係者が参加する「近畿地域飼料増産会議」において、当场における試験結果を報告しました。

参加者からは「新型アブトラップによってアブの捕獲効果が向上したことが良くわかり、有用性を理解することができ

た」と、高い評価を受けました。

今後は、より効率的な設置場所の検討など、農家への普及性の向上に努めます。

※1 農研機構；国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構

※2 アブトラップ：アブを集める捕獲器



報告風景
捕獲数比較成績（7月~9月）

7月~9月捕獲数	
新型トラップ	80匹
従来式	20匹



畜産センター碓高原牧場